

国内株中心の投信運用ランキング

順位	ファンド名 (カッコ内は運用会社)	騰落率 (%)
1	京都・滋賀インデックスファンド (野村アセット)	-5.8
2	遺伝子情報革命 (大和投資信託)	-21.7
3	日本株配当オープン (中央三井アセット)	-22.4
4	日本勝ち組ファンド(3カ月決算型) (ニッセイ)	-22.4
5	日本勝ち組ファンド (ニッセイ)	-22.5
6	日本優良株・ファンド (フィデリティ)	-23.4
7	日本配当成長株・ファンド (フィデリティ)	-23.7
8	情報エレクトロニクスファンド (野村アセット)	-23.7
9	みずほ 好配当日本株オープン (損保ジャパン)	-23.9
10	日本株オープン (AIG)	-23.9
11	日本好配当株投信 (野村アセット)	-24.0
12	リサーチ・アクティブ・オープン (野村アセット)	-24.3
13	IBJ ITMジャパン・セレクト (DIAM)	-24.6
14	好配当日本株式オープン (野村アセット)	-24.6
15	好配当利回り株ファンド (しんきん)	-24.6
16	東海3県ファンド (東京海上)	-24.7
17	日本インカム株式ファンド (新光投信)	-24.8
18	ジャパン・オープン (フィデリティ)	-25.2
19	日本成長株・ファンド (フィデリティ)	-25.3
20	スーパートレンドオープン (野村アセット)	-25.5

(注) モーニングスター調べ。純資産残高100億円以上の投信について3月末の基準価格(分配金込み)年間騰落率をランキング。上場投資信託を除く。騰落率は小数第2位以下を切り捨て

国内株式型

全ファンド、マイナス運用

二〇〇七年度の投資信託の運用環境が、米国の信用力の低い個人向け住宅融資(サブプライムローン)問題に端を発した金融市場の混乱で大幅に悪化した。〇八年三月末までの一年間で投信の運用成績をランキングで見ると、国内株式で運用する投信はすべてマイナス運用になった。(一面参照)

投信ランキング

2007年度

—上

任天堂・商社株組み入れ

下落率小幅に

金融商品評価会社のモーニングスターが残高百億円以上の日本株投信百三十六本の騰落率を調べたところ、〇七年度はすべてのファンドでマイナス運用だった。下落率が一ケタだった投信は一つだけで、ほかはすべて二〇%を超える下げだった。〇七年度は日経平均株価が三七・五%下落し、三年ぶりのマイナスを記録。日本株投信の運用成

績も大幅に悪化した。下落率が小幅にとどまったのは商社セクターなど資源高の恩恵を受けたり、大幅に上昇した任天堂株を上位に組み入れたファンド。新興国の経済成長期待を背景に外需銘柄の投資比重が高いファンドも比較的下落幅が小さかった。下落率が最も小さいのは野村アセットマネジメントの「京都・滋賀インデックスファンド」。同ファンドは両府県に本社か製造拠点を持つ企業に投資。任天堂株を約四割組み入れて、運用成績を押し上げた。

同ファンドは〇六年度の日本株投信でも二位だった。二位は主に医薬品企業に投資する「遺伝子情報革命」。「医薬品株は景気の影響を受けにくいので、相場の下げ局面では相対的に強かった」(運用する大和証券投資信託委託)という。

「日本勝ち組ファンド(3カ月決算型)」(四位)と、「IBJ ITMジャパン・セレクト」(十三位)はコマツやダイキン工業株など外需関連銘柄をそれぞれ上位に組み入れ、全体より下落幅を小幅に食い止めた。

〇六年度好調だった分配金を定期的に出すファンドは、〇七年度に苦戦した。定期分配型は配当利回りが高い電力株などを組み入れるケースが多いが、前年度と違い電力株が振るわなかったためだ。「みずほ好配当日本株オープン」など上位に来たのは一部だ。新興市場の低迷を背景

に新興企業に投資するファンドも厳しかった。代わって「日本成長株・ファンド」(十九位)など東証一部の投資比率が高いファンドが総じて上位にきた。